

## 調査研究報告書

事業主体名	広島文化学園大学	電話	
代表者職氏名	講師 伊藤 駿	ファクシミリ	
調査研究名	接触／非接触を組み合わせた交流の模索		

## 1 調査研究の実施概要

実施内容	<p>南相馬市の課題解決のために、以下の調査研究を実施しました。</p> <p>新型コロナウイルスの流行に伴い、これまで被災地支援をはじめとする交流が基本としてきた直接接触による支援が困難となっている。そこで本年度は、オンラインサービスを中心とした非接触と、学生ボランティアによる接触を有機的に組み合わせた子ども支援活動を展開するため、以下の内容を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校やPTAに対する聞き取り調査（どのような活動が必要とされているのか、学校側のICT整備の状況、子どもたちの状況）</li> <li>・非接触を中心とした子ども支援活動（8月および3月）</li> <li>・ボランティア学生に対するフィールドワーク（3月）とそれに関する聞き取りを実施</li> </ul> <p>まず1点目の聞き取り調査においては、小高区および鹿島区の学校教員からお話を伺うことができた。新型コロナ拡大に伴うGIGAスクール構想の前倒しなどにより一人一台タブレットが実現できそうである一方で、その活用方策については学校ごとで差が見られることが明らかになった。また、休校解除後については既定のカリキュラムを遂行することが中心となり、休校中に生じている子どもたちの間の経験格差や学力差について十分にケアすることが難しいことが聞かれた。</p> <p>2点目の子ども支援活動においては、中学校の夏休みと春休み期間中にオンラインで学習支援活動を実施した。夏休み期間中は毎日1～2名の子どもが参加し、大学生ボランティアにわからないところを聞きながら、勉強を進めることができた。</p> <p>3点目のフィールドワークにおいては、関西圏に在学している3名の学生を引率し、南相馬市内の施設を中心に見学した。新型コロナの影響が懸念されている中で、様々な制限をしながらの活動であったが、2点目に述べたボランティア活動のモチベーションにつながったり、東日本大震災について実感を持って学ぶことができたという感想を得られた。</p> <p>これらの内容をもとに、本年度の成果として次頁に記載の内容を得ることができた。</p>		
調査研究費	総事業費		302,525円
	うち補助対象経費		302,525円
	補助金額		300,000円
調査研究期間	令和2年6月23日 ～ 令和3年3月31日		

## 2 事業実施の成果

南相馬市の課題	<p>調査研究により、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・新型コロナの影響は、学校や子どもたちに深刻な影響を与えているとともに、そのケアについては格差が見られること</li> <li>・タブレット端末などが普及する一方で、その活用状況については学校ごとの差が見られること</li> <li>・直接接触を前提とした支援活動と比較すると非接触の支援活動への参加者数は少なく、何らかの工夫が必要であること</li> </ul> <p>という状況が判明し、南相馬市の課題が明確になりました。</p>
課題解決の提言	<p>課題解決のためには、以下のような取り組みが必要とされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・東日本大震災の影響と同様に、新型コロナの影響についても短期的に顕在化するものだけでなく、中長期的な影響も懸念されることから丁寧な現状把握とそれに対する効果的なケアを検討すること。</li> <li>・配布されたタブレット端末などを積極的に活用し、子どもたちのオンラインサービスへの抵抗を低減し、非接触的支援活動をより効果的に行っていける基盤を上げること。</li> <li>・直接接触を前提としない支援活動を受け入れられるための体制づくり。特に交流という概念の解釈を拡張し、ポストコロナ時代の持続可能な交流人口の増加施策を検討すること。</li> <li>・上記と同時に、震災を経験していない世代向けの学習プログラムを大学と南相馬市が協同で作り上げ、より継続的な交流を可能にする仕組み（協定締結など）を検討すること。</li> </ul>

## 3 添付書類（内容が分かるもの）